

1 児童の実態

(1)学習状況調査結果の推移

	国語			算数		
	5年時	6年時		5年時	6年時	
		A	B		A	B
H22 入学	70.2			57.6		
現 5年	(1.04)			(0.96)		
H21 入学	61.9	72.3	57.9	70.0	77.4	54.3
現 6年	(1.04)	(0.98)	(1.06)	(1.05)	(0.99)	(0.95)
H26 正答率の全国平均		72.9	55.5		78.1	58.2

5年時は佐賀県学習状況調査、6年時は全国学習状況調査の推移。

上段は平均正答率、下段()は県平均を1としての比較

(2)意識調査から読み取れる実態

- 1 5年生は、社会・理科と比べて、国語・算数を将来の役に立つ教科と考える一方で、社会・理科を好きで内容が分かりやすいと考えている児童が県平均と比べて多い。
- 2 6年生は、「話し合い活動をよくしている」、「授業最後のふり返し」など学習態度に関する項目で県平均よりやや高い。
- 3 学校全体の傾向として、朝食や宿題など習慣化されやすい活動には、家庭でも学校でも日々きちんと取り組む傾向にあるが、より自主的な学習活動には積極性があまり見られない。

2 取り組み状況

(1)H25年度の成果と課題(H25年度の取組に対するH26年度の調査結果と課題)

- 1 校内研究の「聞く・話す・話し合う」の取組の一つとして、級外も含めた全職員が教科の限定がない研究授業を実施した。そのことが、5、6年共に観点「話す・聞く」が県の正答率を上回る一因になったと思われる。
- 2 週1回の放課後の算数補充教室や言語活動の充実に向けた校内環境づくりなどを通して、基礎学力の向上に努めてきた。ある一定の成果はあったが、語彙力の十分な定着が見られないところもあり、学習用語を含めた知識・理解への取り組みが必要である。

(2)改善に向けた具体的な取組

① 授業づくり、指導方法の改善・充実のための重点取組

- 1 全学年で「西部型授業」を行うことで、学年間で縦のつながりのある学習指導体制を構築する。課題設定及びねらいと学習のまとめにつながりがある授業を目指す。
- 2 授業展開の学び合いの場面では、話型や相手の発言には自分の意思を示すなどを取り入れることで、児童間につながりのある話し合いを目指す。
- 3 児童の生活場面と授業の学習内容につながりを感じられるような学習問題の提起や学習

のまとめを行うことで、児童の関心・意欲の向上をねらう。

- 4 級外を含め、全職員が言語活動の充実を目指して研究授業を行い、指導方法等について研修を深める。
- 5 タブレットを中心としたICT機器を授業に活用し、児童の意欲を高めるための指導方法の改善に努める。
- 6 スマイル学習（武雄式反転授業）の指導を通して、児童の話し合い活動を活発化させることで、児童の自主性を育てるとともに、教師の一方的な教授型授業からの脱却を目指す。
- 7 算数科では図や式の説明、理科では予想・実験結果・考察など国語以外の教科でも、学習用語等を使った発表ができる手立てをとる。

②（授業以外）児童・生徒の課題改善のための重点取組

- 1 全職員による学力向上対策研修会を年4回（4，6，8，12月）もち、学習態度、学習道具などの学習習慣への取組や学力の結果分析及び今後の取組についての協議等を行い、統一した指導体制を図るようにしている。
- 2 平成26年度の調査結果を、各学年ごとに独自観点(国語7観点、算数4観点)と正答率と標準スコアで分析し、課題について全職員で共通理解するとともに、学力向上のための対策を提案し、学校全体で具体的な取組を行っていく。例えば、級外職員を中心に主に算数科の補充学習として週に1回の5，6年生対象の放課後学習会を継続する。
- 3 週に1回、朝の時間に「計算タイム」を設定し、主に四則計算の正確さ、速さを身に付けさせることを目指す。また、児童の登校時に「おはようチャレンジ」として九九を唱えさせたり、ことわざや詩、百人一首等を校内に掲示し日常的にふれさせていく。
- 4 児童に親しみを感じさせ、児童が進んでいけるような図書室の環境整備や読書を勧める取組を継続し、児童の読書に対する関心を高めさせ、日常的な読書習慣形成を目指す。
- 5 児童支援研修会において、児童の実態やQ-Uテストの結果をもとに課題や対応・支援に関する共通理解の場を設けることで、児童が安心・安全と思える学校雰囲気づくりを行う。
- 6 毎日の全校一斉の取組として、朝の歌の集い、朝と昼の立腰、無言掃除を通して、静と動のけじめのある生活態度と心構えの習慣化をねらう。